疎開の想い出

岩切　キヨ（４組）

私達のクラスでも、もう何人かの盟友が天国へと召されてゆかれた。
卒業した年の夏だったと覚えている。男子の級友から暑中見舞を頂いた。今までついぞなかった事なので、びっくりしたがうれしかった。そこには、たあいのない文面に水蓮の花がうす紫色の水彩で描かれていた。丁寧に描かれたその小さな蓮に見入りながら、みんなに出されたのだろうか、何枚も描くのは大変だったでしょうと思いながらそのまま仕舞いこみ、その夏も過ぎてしまった。
何年か経ってから、その友の早逝を知ったのだった。今でも時折思い出す、心残りの想い出となっている。

このところ夜中に目覚めると思い出される事がある。もう記憶の底に埋もれてしまったかに思えていたのだったが、人との別れを知ったのは、あの子との別れからだったかなーと思うのだ。
もう終戦も間近に迫っていた五、六月の頃だった。私の家族は、時折小雨のばらつく山道をたどっていた。吉野の中別府という所へ父の知人を頼って疎開したのだった。今思うと、滝の上辺りだったのだろう。高みから見下ろせる所で立ち留まった父母が、先日の鹿駅の空襲で焼けたばかりの我家の辺りをじっと眺めていた。しばらくは振り返りながら上っていった。
上り着いたその里は、梅雨時の水を湛えた水田に苗が青々と風に揺れていた。今まで見た事もなかった田舎の風景が私をすっかり虜にしてしまった。そこでの夏から春までの暮らしは、今でも一つ一つ思い出される。
近所の子供達の後についていって野苺を摘みに行ったり、山の畑に母や姉と芋を植えに行ったりと毎日が楽しかった。

吉元さんという農家の離れが私達の住居となった。大家族らしかったが、ひさおさんという大きなお兄さんが我家の事をお世話して下さっていた。近所には親戚の方々がおられて、末の男の子は私と同じ年だった。すぐによく一緒に遊ぶようになった。今ではもうその子の顔も定かには覚えていないのだが。
お兄ちゃんもいて、よく遊んでもらった。「こうじ、ちょっと待っていろよ」と、牛小屋の干しわらの中から、まだ目もあかないねずみの子を大事そうに持って来て「ホイ、こうじ」と両手の平にのせてくれた。「うわー可愛いね」と私も覗いて触らせてもらった。
おばさんはいつも「お昼を食べていっきゃんせな」と言われるので、いろりの回りでその子の隣にきんと座って待っていた。自在鍋に吊るした鉄鍋の中から温かなおじやをついでもらって美味しく頂くのだった。おばさんは何故かいつも優しくお話をして下さり、幸せな気持ちになるのだった。二人のお姉さんも優しい方々だった。おじさんは病気がちで、時々吉元家で過ごされる日もあった。

その日は真青な空で気持ちの良い昼下がりだった。ひさお兄さんと田圃の畦道に立っていた。風がそよそよと吹き渡り、青い稲穂が波のように揺れるのを見ていた。
その時、銀色の飛行機が空高く、軽く爆音を響かせてゆっくりと飛んで行くのが見えた。いつもならすぐに逃げ帰り、防空壕に隠れていつまでも出て来ない私だった。その時、ひさお兄さんが言った。「もう逃げんでん良かったっど。戦争は終わったでね」と何とも言えない込み上げてくる様な嬉しさは、今でも忘れられない。まだ幼かった筈なのにそういう風に思ったのだった。

春になっていた。こうじちゃん、遊ぶがと声をかけると、家の中から手招きした。床の間が華やかにお雛様が飾られていて、障子越しに明るく日が差し込んでいた。雛壇の前にもあまり見た事のない土人形がいくつか飾ってあった。もの珍しそうに眺めていると「おまんさーにもこいを上げもんそかい」と、驚いている私に、おばさんが大きなきれいな色の人形を一つ抱かせて下さった。嬉しくて大事に胸に抱えて持ち帰った。
四月になり、私達は吉野の小学校へ一緒に入学した。校庭に並ばされたが、私の組がどの列かわからなくなっていた。こうじちゃんを捜して、その後に並んで教室へ入った。しばらくして担任の先生が捜しに来られた。ボヤシー子だったなぁと今頃思う事だが、今もあまり変ってはいないようだ。
丁度、又梅雨を迎える頃、疎開の家を引き上げる事となった。その時の事は慌しく過ぎて、どのように別れて来たのか全く覚えがない。
姉が通っていた付属小へ転校した。公民館の北側に焼け残っていた旧教育会館が仮の校舎となっていた。転校生活にもようやく慣れた頃、夏休みになった。
町に用事で来たと立ち寄られたこうじちゃんのお姉さんは「こうじが死んだとお」と告げてハラハラと涙を流されるのを何も言えずに黙って見ていた。肺病だったそうだ。この歳になって、あのお母さんの気持ちがわかったような気がする。

一年の終了式が終わった後で、レクレーションをする事になった。机の前に隣の組の男の子が一人出て来た。クリクリ坊主の一休さんのような可愛い男の子だった。何が始まるのかなと思っていると「がまは蟇でも四六のがま筑波の山に住む・・・」と、大きな声でがまの油売りの口上を始めたのだった。とびっきり臆病だった私は、その男の子の勇気にすっかり感動してしまった。
高校三年生になって一緒のクラスになった浜崎隆さんの少年時代であった。